

『ひまわり』

1970年／イタリア・フランス・ソ連／ヴィットリオ・デ・シーカ監督作品

見るたびに哀しみは深く

会員 樋口 歩 (69期)

『ひまわり』（原題：I Girasoli）は、1970年に公開された、伊・仏・ソ合作の映画である。タイトルからして弁護士が登場しそうであるが、法廷ものではない。

結婚後すぐに出征したイタリア人夫婦の夫・アントニオがソビエト戦線で生死不明となった。残された妻・ジョバンナは、わずかな手がかりをもとに単身ソ連へ渡り、あてもなくアントニオを捜し歩く。ついに探し当てた先で、アントニオがロシア人の女性と結婚し、すでに子をもうけていることを知り、再会したものの、言葉も交わさずに去る。後日、アントニオはジョバンナに会うためイタリアへと渡り、再会を果たすが、ジョバンナにもすでに別の夫と子があることを知る。二人は、もはやそれぞれの人生が決して元に戻れないところまで進んでしまったことを悟り、打ちひしがれ、無言で抱擁し、そして離別する。

この映画を初めて見たのは高校2年生の時である。国語の教諭が、ある日突然、「今日は映画を見ます」と言ってクラス全員を視聴覚室へと連れて行った。皆、わけもわからず、仕方なく見始めた。「見せられた」というほうが近いかもしれない。

しぶしぶ見たにもかかわらず、感動は深かった。逆に、何の期待もなかったからこそ不意を突かれたのかもしれない。それまで映画を見て泣いたことはなかった。涙が落ちてとても驚いた。それを隠すのに必死だった。

ストーリーの中盤に有名なひまわり畑のシーンが登場する。ジョバンナがソ連へと渡り、同国外務省の

職員の協力を得て、アントニオがかつていたはずの戦場へと列車で向かう。ジョバンナはアントニオの生存を確信し、車中で同行の外務省員に微笑みかけるが、相手は寂しげな笑顔を一瞬浮かべると、すぐに車窓へと視線を逸らした。ヘンリー・マンシーニ作曲の挿入曲が哀切極まる主旋律を展開するとともに、窓の外には地平線まで一杯のひまわり畑が広がり、列車とともに激しく揺れる。陽気なはずの風景の中にジョバンナとアントニオの重く暗い結末が逆説のように暗示され、息苦しくなるほどの悲しさに襲われる。『ひまわり』の最も印象的なシーンだ。

最初に見た時は、なぜ涙が出たのか、何がそんなに悲しいのか、自分でもよく分からなかった。哀しい調べの音楽のせいかな、などと考えていた。

アントニオもジョバンナも過酷な運命を受け容れてそれぞれの幸せを築き直したに過ぎない。どちらがどこで間違えたわけでもない。だからこそ、離別の結末は避けがたく、余計に残酷である。我々は、そのような悲痛な巡り合わせにおそらく耐えることができない。自分の人生が進むにつれて、映画の二人の哀しみがより深く心に突き刺さる。涙の理由を最近ようやく理解しつつある。

「好きな映画」の話をする時、この映画を知らないと言われることが多い。すでに公開から50年近くが経っており、完全に「昔の映画」の部類に属している。映画をよく見るという方でも触れる機会が少ないのかもしれない。

この稿をきっかけに、この映画がより多くの方々に親しまれることを願い、ここに紹介することとした。